

令和7年度小学校教科担任制実施報告書(中学年型(第4学年))

学校名
東広島市立龍王小学校

1 学校の概要

(1) 学校の学級数

	通常学級							特別支援学級	合計
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計		
学級数	6	6	5	5	6	5	33	7	40

2 加配教員が専科指導を行う教科及び週当たりの担当授業時数

(1) 第4学年の指定教科等

指導教科等名	指導学年	指導学級数	1学級当たり時数(週)	授業時数(週)	兼務校での実施
理科	4	5	3	15	
外国語活動	4	5	1	5	

授業時数 計 20 (a)

(2) その他

指導教科等名	指導学年	指導学級数	1学級当たり時数(週)	授業時数(週)	兼務校での実施
理科	3	1	3	3	

授業時数 計 3 (b)

授業時数 合計 23 (a)+(b)

3 教科担任制推進教員を配置した授業計画

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	体育	道徳	外国語活動	総合	特別活動
週当たり標準授業時数	7		2.6	5	3	1.7	1.7	3	1	1	2	1
4年 1組 (担任: A)	A	A	A	A	推進	A	A	B	A	推進	A	A
4年 2組 (担任: B)	B	B	B	B	推進	A	B	B	B	推進	B	B
4年 3組 (担任: C)	C	C	C	C	推進	D	C	C	C	推進	C	C
4年 4組 (担任: D)	D	D	D	D	推進	D	D	C	D	推進	D	D
4年 5組 (担任: E)	E	E	E	E	推進	D	E	E	E	推進	E	E

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	体育	道徳	外国語活動	総合	特別活動
週当たり標準授業時数	7		2	5	2.6	1.7	1.7	3	1	1	2	1
3年 1組 (担任: F)	F	F	F	F	推進	F	F	F	F	F	F	F

4 第4学年担任が指導を行う教科等及び週当たり授業時数

学年・学級	児童数(人)	担任	担任する学級以外の授業時数(週当たり)				担任する学級の授業時数(d)	授業時数の合計(c)+(d)
			指導学年・学級	教科等名	時数	時数計(c)		
4-1	34	A	4-2	音楽	1.7	1.7	22	23.7
4-2	34	B	4-1	体育	3	3	23.3	26.3
4-3	35	C	4-4	体育	3	3	23.3	26.3
4-4	37	D	4-3	音楽	1.7	3.4	22	25.4
			4-5	音楽	1.7			
4-5	36	E			0	0	23.3	23.3

5 成果と課題

(①授業の質の向上、②多面的な児童理解、③小・中学校の円滑な接続、④教師の負担軽減、⑤その他)

〈効果のあった取組〉

- ① 指導教科に焦点化した教材研究や、同じ授業を複数回行うことにより授業改善を行った。



〈成果〉

- ① 指導教科数が削減されることで、教材研究の時間が十分確保できた。また、同じ授業を複数回行うことで、発問や板書などを工夫改善することができ、授業の質が向上し、児童の学習意欲や学習内容の理解度を高めることができた。

〈児童アンケート〉

「教科担任制で学ぶことで、勉強の内容がよく分かるようになった。」

肯定的回答

第1回 90.5% → 第2回 91.4%

②	児童の様子や課題についての情報を共有し、組織的に生徒指導を行った。
③	教科によって担当教員が変わることで、高学年での専科授業や中学校での教科担任制のイメージをもたせることができた。
④	教科担任制推進教員の授業や担任間の授業交換により、指導教科数を削減し、学級担任が学級事務や指導教科に充てる時間を確保した。
⑤	学習評価の改善を行った。



②	学年部で児童の様子を共有することで多面的に児童を理解し、組織的に対応・指導を行うことができた。担任している学級以外の児童との関わりが増えることで、学年部全体で児童を育てるという意識が高まり、学級の児童についての諸問題や悩みが共有しやすくなった。また、児童が担任以外の教員に相談する姿が見られ、支援体制の充実にもつながった。
③	教科担任によって指導方法や授業の雰囲気、ノートの書き方などが変わることを経験した。このことにより、教科の特性に応じた学び方を意識するようになった。
④	推進教員が理科を担当し、予備実験や教材の作成・準備を行うことで、学級担任の負担軽減になり、担任業務に充てる時間を確保することができた。 推進教員が外国語活動を担当することにより、ALTと効率的に打ち合わせを行うことができた。また、推進教員が外国語活動の所見を作成するため、担任が他の所見作成や評価に充てる時間を確保でき業務改善につながった。
⑤	同じ評価者が評価をすることにより、指導内容と評価の視点を統一することができ、学級間の差異が減り、より公平な評価を行うことができた。

〈課題〉	
①	時間割の変更が臨機応変にできないため、教科によっては効果的な指導が難しくなる内容がある。(例えば、理科の「天気による1日の気温の変化を調べる学習」「半月の位置の変化の観察」) 児童の理解度に応じた個別指導の時間が十分確保できていない。 欠席等で未学習の内容がある児童やテスト未実施の児童への対応が難しい。
②	大規模校では担当するクラス数、児童数が多いため、特に年度初めは、各クラスの児童の名前や実態把握が十分にできないため、適切な指導や支援が難しいことがあった。
③	教科担任制について、中学校と直接連携を図ることができなかった。
④	今年度は、担当教科によって持ち時間数に偏りがあったり、担任間の授業交換を実施できない学級があったりした。 また、体育科と音楽科は、運動会や水泳、学習発表会の練習日程の影響を受けたり、各教科の年間授業時数が異なっていたりするため、時間割を調整することが難しかった。



〈対策〉	
①	その教科の時間内だけではできない学習がある場合は、担任がその内容を指導できるように、内容や方法等について計画的に連携を図る。 授業中に個別指導の時間が確保できるような内容を計画したり、個別に質問できる時間を確保したりする。(ドリルタイムの活用等) 欠席した時間の内容や板書をクラスルームで共有したり、休憩時間等に該当児童に指導を行ったりすることで対応する。
②	担任と連携を図りながら、迅速な児童実態の把握に努め指導に生かす。特に年度初めは児童の様子について情報共有を密に行い、指導や支援の仕方において共通理解を図る。
③	小中連携の機会等を活用し、小学校の教科担任制の様子について伝えたり、中学校の教科担任制の進め方や効果的な取組について学んだりするなど、日頃から中学校と情報共有できる体制を整える。
④	次年度は、より効果的に教科担任制を実施できるように、年度初めに実施教科や時間割を再検討する。 年間を見通して、学校行事や出張等を踏まえた時間割調整を行う。